

終戦の日のチラシ配り

岐阜支部 市川 玲子

止めてくれた人も多かったのです、その時の様子を少し紹介します。

30〜40歳の男性2人連れが足を止め、チラシを受け取ってくれたので、「今日は終戦記念日です。日本の敗戦により今の憲法が作

8月15日終戦の日。今年も国賠同盟のチラシ配りを行ないました。参加者は9人、名鉄岐阜駅前で1時から配り始めました。アーケードの屋根があるといつても猛暑の中、道行く人々に声をかけながらチラシを手渡すのは大変で汗が吹き出します。

チラシはなかなか受け取ってもらえないことが多く、ましてや対話が出来るのはわずかです。例年だと、男性は素通りする事が多い中、今年は何故か足を

岐阜県版

第386号

2022年9月15日

治安維持法国賠同盟

岐阜県本部

〒500-8879

岐阜市徹明通7-13

岐阜県教育会館308号室

Tel 058-252-5366

振替00840-2-88638

られたけど、改憲が叫ばれている中で、とても危うい状況です。77年間戦争をしないでこれたのは平和憲法のおかげです」というような話を話しかけると、2人ともチラシを見ながらうなずいて、「国民がしっかりせねばあか」と言うことや」という言葉を残して足早に去って行きました。

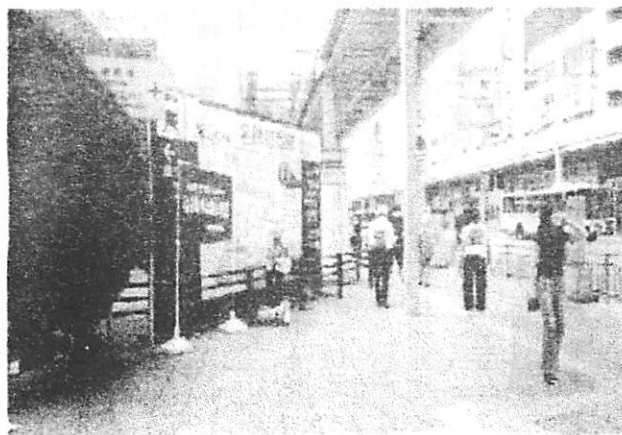
次に高校生らしき男子学生が足を止めてくれたので、今日が終戦記念日であること、戦前の治安維持法で反戦思想の持ち主が弾圧されたことなどを話し、「治安維持法って、学校で習ったことある？」と尋ねると、「あります」との返事だったので、このチラシ配りをしている理由などを語りかけると、ジッと聞いてくれました。学生さんともつと話が出来たら、と思いつつながら「ありがとう」と声をかけました。

チラシ配りの最後の頃、信号待ちをしていた高齢女性に声をかけると、「終戦記念日」にすぐ反応を示してくれました。そして、「私は終戦の時は4歳だった。木曾川に住んでいたけど、岐阜の空襲は覚えてる」と言いながら、信

私たちの運動の基本
ふたたび戦争と暗黒政治を許さないために

- 一、治安維持法体制の復活に反対する
- 二、国は、戦前の治安維持法が、人道に反する悪法である事を認めること
- 三、国は、治安維持法の犠牲者に、謝罪と賠償をおこなう事

号が変わったので渡って行かれました。猛暑だったので、30分余りの行動でしたが、素通りする人が多い中で、チラシを受け取ってくれた人、対話が出来た人がいて、たとえ少数でもこうした活動を続けることの重要さを感じました。



第31回岐阜支部総会開催

岐阜支部 上野 美美

8月20日(土)、県教育

会館で第31回岐阜支部
総会が開催されました。

しばらく顔を見ない人の
参加も4人ありました。

病後の夫を支えてのご夫
妻と久しぶりの出会いに

話が弾みました。(皆さん
「不屈」を読んでくださっ

ているのだ)と励まされま
した。

はじめに、この一年間に
お亡くなりになった島尻

永司さん、桂川晴美さん、
広瀬夙子さんの3名の方

のご冥福を祈って黙祷し
ました。

上野支部長挨拶と来賓
の片桐県本部会長の挨拶

の後、河田議長で議事が
進められました。小澤事

務局長の活動報告では個人署名は目標の1
9%、団体署名は30%にとどまりました。

亡くなられた方、退会者もあり会員数は1
0名減りましたが、女性部の活動、3・15学

習会や、映画「わが青春つぎるとも」の上映
運動、8・15終戦記念日の街頭宣伝・ピラ

配りの活動も行なってきました。

総会の後DVD「種まく人びと」を上映し
ました。

この映画は国賠同盟創立50周年記念に
作られたものです。映画は、高齢になった犠

牲者が車椅子や歩いて国会請願に行く場面
から始まりました。山田朗・明治大学教授が

歴史的背景を説明されています。

日清戦争、日露戦争で日本は領土を拡大
し、国民を喜ばせたが生活に苦しむ労働者

のストライキ、農民の一揆が多発していまし
た。日中戦争の始まる前の不穏な中、192

2年日本共産党が発足し、1925年、それ
を弾圧する治安維持法が制定されました。

1937年(昭和12年)に日中戦争が、19
41年(昭和16年)太平洋戦争へと突入して
いきました。

映画では小林多喜二が拷問で殺され、両
股が真っ黒になっているのが映し出されまし

た。内蔵も出血で真っ黒になっていたであろう
と思われる。山宣の映画「武器なき闘い」

の場面もありました。父親が高高だったとい
う人が「貧農の父がなぜ特高になったか、戦

後警察を辞めたのは何故かと問い続けている」
と発言していました。生活図画を描いて捕ら

えられた人、印刷労働者のクラブを作って捕
らえられ半殺しにさせられた人の証言があ

りました。

山田朗教授は「どんな時代でも自由と民
主主義を求める人達を根絶やしには出来な

い、必ず火種は残され大きくなっていく」と
言われました。

今世界は、ロシアの侵略に対する批判と核
廃絶の声も大きくなっています。絶対に核兵

器を使わせてはなりません。

治安維持法で弾圧された人たちに謝罪す
る日が必ず来ると確信しました。



明和の西濃農民一揆(盛榊騒動)

岐阜支部 堀田 紀治

大垣藩は年貢米4斗3升を1俵としていた。宝暦13年(1763年)頃から明和(1764年)にかけ1斗榊に山盛り4杯を1俵とした。これで同じ4斗俵でも前より数升増で、藩は収入増だが、農民は増税となり生活は一層苦しいものになった。その上宝暦年末より明和元年にかけ農作物の不作が続き生活は困難を極めた。

明和2年(1765年)秋、池田郡宮地村の要助と大野郡有里村新五郎は年貢米納入を終え帰宅途中、互いに農民の窮状を語り合った。

☆要助曰く「年貢を盛榊でとられては、吾等はどうも生きはゆけん」

☆新五郎曰く「左様左様、私達は芋の粥も喰れんぞ、此うえは飢え死にする外はない、どうせ死ぬならたまたま死ねぬ、農民の助かる事を実行しようではないか」

☆要助答え「せめて盛榊だけでも御免になるよう、殿様に直々お願いするより仕方がない」と、両人心を固くし、抗瀬川(揖斐川)の首

謀者として、事を起した。

その後、苦心惨憺秘策を尽くし、緊密な連絡をとり、事を進めた。

一味徒党西組は池田山の善福寺平に集合し、密議の結果首謀者が判らぬように傘連判状を作り、これを廻覧し団結をはかった。

明和3年(1766年)9月末、川西の代表要助、川東の代表新五郎、は哀訴嘆願の直訴状を持ち蓑笠、草履に身を固め、農民達は手に竹槍を持ち、蓑旗を押し立て、西は池田山に、東は更地山にそれぞれ結集し、赤坂山の狼煙を合図に城下へ強訴のために進発。そして安八郡笠縫堤で数千人が合流した。総数5万人とも噂された。

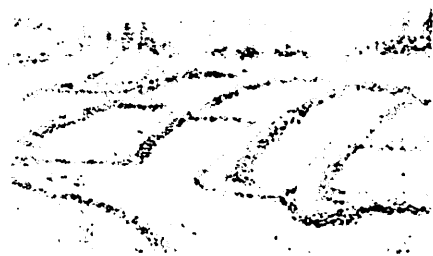
大垣城の天守閣で、これをみとめた藩は、直ちに非常招集をかけ、軍兵を整え、強訴の防備に当たった。別に騎兵の役人数名は笠縫堤に駆けつけ極力説得に努め、要求条項を全面的に承認した。一揆は一先ず退散した。

藩は領主の帰城を待つ、正式に盛榊を廃止し、その上救米6百俵を下付した。農民の受けた利得は実に莫大なものがあつた。

この闘争は、①要助、新五郎両人等が一命を賭しての努力と熱誠によるものであつた。②同時に藩は、この百姓一揆を積極的に平定しようとしていない。僅かの部隊を城下町警備に出しただけで、一揆を撃破しようとはせず一揆の要求は総べて受け入れ、さらに救米を出している。江戸時代には「自分らの死をかけて

一揆するほどの要求は正しいもの」として、領主側が要求を呑む事が多く、これもその一例である。③しかし、徒党強訴の責めは免れず処分すること江戸時代の通例で、盛榊騒動もその類型的処理を受け、「このものども、村々をさそい徒党を催し、騒動いたせし張本人により、かくの如く行なうものなり」として、要助、新五郎、喜平次(池田郡宮地村・現池田町宮地)他1名の4名が一揆の首謀者として斬罪された。等の特徴を持つている。この哀しい歴史は、明和義民と讃えられ、池田町に碑が建立されている。

こうした伝統を持つ西濃地域は小作人農民闘争の発祥の地と(明治東海政治史)いわれ、明治8年(1875年)全国初めての小作人組合が結成され、いる。



南米大陸最高峰 アコンカグア

中濃支部 澤田善太郎

スタート段階でのうっかりミス

山好きのぼくが、憧れのアルプス・マッターホルンやモンブランにまず登りたいと思って、いたのは間違いではなかったと思いたいのですが、でも心の底には、やはりヒマラヤとか8000mに登れぬものかこの思いが潜んでいた事は確かでした。それには先ず4000m峰5000m峰、そして6000・7000mと段階的に身体能力を慣らし高めていく必要があると思っていました。しかしそれは間違いだといふ経ってから気付きました。退職後はもうすでに60歳代です。時間が無いのです。すぐに8000m峰に挑まなくてはいけなかったのだと解った時は、もう遅すぎました。でも七大陸の最高峰全部は無理としても、過半数ぐらいはやつてみたいないとトーンダウンしながらも思うようになっていききました。

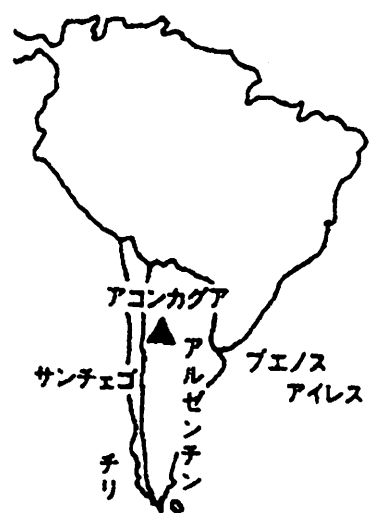
登山設立と高所登山学校

日本人の海外渡航は1955年から自由化され

ました。登山の誕生は1950年にルーツをもち、松本善明や深田久弥など二人氏が発起人でした。そして全国連盟設立は1953年、連盟の中に海外委員会が設置されたのは1970年です。その後ようやく1978年の8・10月、登山全国連盟隊がネパール警察登山探検財団との合同でガネッシュ・ヒマールのパビーール峰(7021m)初登頂を目指し活動を開始しました。これを成功させようと全国の登山では資金カンパや物販販売などの活動が展開されました。そして雪崩に悩まされたりしながらもついに9名の登山隊員と5名のネパール隊員が登頂を果たしました。でも当時一般登山会員にとつて、海外登山の念願はあつても休暇や費用の面で手が届きにくい現状がありました。そこで登山内に1988年から「実践高所登山学校」が開始されました。その目的は、海外での高所(6000m以上)登山のチャンスに恵まれない登山会員にも機会を提供し、その経験者を数多く育て普及をはかることにありました。第二回は同年1月からで、パビーールの旧コミニズム峰(7495m)、隊長は登山きつての大ベテラン氏。この登山高所登山学校は2004年までで中期短期合わせて25回実施されました。2001年に行われたのがアンデス／アコンカグア(6959m)で隊長は同峰をすでに何度も経験済みのそのスさん、副隊長のミさんも含め全隊員9名の中に岐阜からの参加者で60歳のぼくがいました。

白い嵐が襲うアコンカグア

南米大陸最高峰のアコンカグアは、ほぼ7000mの標高があるとはいえ、しつかり高度順応をはかり、気象条件さえ静穏であれば、大陸最高峰中ハイキングの山であるオーストラリアのコジウスコ(2228m)に次いで登りやすい山だとも言われています。ただしこの山には魔物が棲んでいます。それが白い嵐(ホワイト・ブランク)です。これには地元のガイド達も恐れをなしています。なにしろ雪煙を巻き上げる風速30m以上の嵐が荒れ狂うのです。行動すれば確実に吹っ飛ばされます。その時の登頂確率は万に一つも無い！エベレストに登った人でもこの山には登れないことがあります。2015年1月(最盛期)では3日間しか登頂者が出なかったといまです。この嵐は、南米大陸の南端で嵐の大地といわれるパタゴニア辺りとの関連があるのでしょうか。12月25日にアルゼンチン・メンドーサに到着したぼくらは、お金を払うからやつてもらえる



ツアーではないので、諸準備や手続きに忙殺された後、28日にようやく入山行動に入りまし
た。この日はコンフルエンシア(3368m)まで、ア
ンカグア南壁の麓4100mまでの順応行動をした
後テント泊となりました。

《BC到着→撤去の日誌》

29日 ベースキャンプ(BC4250m)地到着。大型
食堂テントを含め全部で二張り。その中にはほ
くの自前テントもある。

30日は休養日

31日 高度順応を兼ね第一キャンプ(C15200m)
の地点へテント3張りを全員で設置する。

1/1日 21世紀最初の元旦は休養日。(ただし
隊長・副隊長はCへの物資運搬とテント3張の
うちの2張を、更に上部のニド・デ・コンドルス(54
00m)へ移動される)

2日 順応行動で新Cへ上がり全員が泊まる。

3日 更に上部のベルリンキャンプ(5800m)少し
上6050mまで順応で登り一気C3へ

4日 休養日

5日 いよいよアタック体制に。A隊5名B隊5名
A隊が出發しC1泊。

6日 B隊も出發しC1泊。A隊は更にC2(5800
m)を設置し泊。この日少し雲や風が出てくる。
西のチリ方向からは黒く厚い雲がこちらへ向かっ
てくる。流れが早くなる。やがて雪が降り出し
た。天気はどう見ても下り坂になってきたと思
われる。夜になると風雪は一層強さを増し、

夜中にテントが強風で押しつぶされそうになる。
「日風雪は収まる様子がなく、むしろ強くな
る感じだった。A隊は今日C3から山頂アタック
を敢行する日だったが、その大変さか思いやら
れた。悪いことは重なるもので、トランシーバー
の不調でC2間の交信ができなくなってしまう
た。それに加えてA隊のキャンプで副隊長のさ
んが高山病の一種低血糖で倒れてしまった。
その為B隊にいる隊長がC2へ上がり指揮を
執ることになった。

8日 C2にいる隊長によると、今日の登高は不
可能とのこと、テントをたたみ共同装備にと
もに小さなベルリン小屋へデポしてC2へ下るとの
無線があつた。C2の二つのテントに9人が入れる
だろうか。結局悪天の中を更に2人がC2まで
頑張つて下る!となった。その方が体は休ま
るからだ。で、C2は隊長、ぼくと2女性に。

9日 残りの日数からすると、今日C1からC2
に上がり、明日10日には頂上アタック、その日
のうちBCまで下らねばならない。ところが風
雪はますます荒れ狂い、トイレで外へ出るのも
大仕事。周りにあつた他のテントは大部分が撤
収し辺りは広々としてきた。睡眠もあまりと
れないため疲れはだんだん溜まってきた。明日
は残された最後の行動日。天気はきつと良く
なるに違いない...

10日 昨夜はまともに眠れなかった。風圧に押
されるテントを体で必死に抑えていないと、も

し張り綱が切れたらえらいことになる。夜中の
3時頃2人の女性テントから代表一人がぼくらの
テントへ来て「この状況では私たちとても歩けな
いので、今日の登りを断念しようと思うんです
けど...」と訴えた。隊長は「分かりました」と言
い、少し間をおいてから「澤田さん・行きます
か?」と聞いた。悪天も「こらが山場で、今
日辺り風も止み天気は回復するのではないか、
そう何日も荒れ続くはずが...との希望的思い
もあつたが、もう一つは上のC2物資がデポして
あるのを回収する仕事がある。テントを始め貴
重な資材を捨てるわけにはいかない。誰かが行
かねばならない。ぼくは「はい、よろしくお願
いします」と答えた。

不運と幸運

炊事用具は女性テントの方にあつたので、ぼ
くは直ぐに「悪いけど何か暖かいものをおなか
に入れて出發したいので」とお願いに行き、その
間に低温と強風に備えての装備を調え午前5
時に隊長と2人でテントを出發した。今日は登
山行動のできる最終日で、明日は下山準備の
作業をBCでやらなければならない。天気が一
気に回復しようものなら登れる所まで登って
みよう、そこへ向かつて最大限の努力をしてみ
ようと思つた。辺りはまだ真つ暗でルー
トが分かりづらい。強風の息を読みながらぼく
は時々耐風姿勢をとる。隊長は「澤田さん、
自分のペースで登つて下さい」と後ろから声をか

けられた。ベルリンキャンプ地にはもう一つもテ

ントは無かった。小さな木製の小屋からデボ品をザックに詰めた。ベクトボトルは壊して中の氷を捨て容器のかけらだけを袋に詰めた。小屋にはエビノシツボがびつしりと付いていた。一瞬雲の切れ間から陽光が差し込んだ、ぼくはその方向を見た。何か光るものが空中に見えた。ぼくは「あつダイヤモンドダストや！」と声に出して言った。でも一瞬のその陽光射し込みは、まだ天候回復の始まりとまでは言えず、強風はまだそれから一層増すかといえずすぐに収まる気配はなかった。回収の作業を終えたところでぼくは、これからの行動の判断を隊長にゆだねた。隊長はぼくの目を見て「ちよつと（登頂は無理だ）と思いますね」と言った。ピークまで標高差でまだ1000m以上。ここからのピストンで2時間以上かかるだろう。第二の強風下での登高は不可能に近い。上部はこれまでの登高に比べ更に困難の度合いが強いだろう。頑張つてここまで来てデボの回収という隊の仕事の一旦が担えたことでぼくは満足した。

ここまで下ると、今度はCの撤収だった。Bのテントを風を持って行かれないようにたたむのは大変だった。各自の個人装備もある。そしてCのCの二つのキャンプ資材を5人で担ぎ降ろすのは、これもおお事で無理だった。そこで無線を使いBCから迎えに来るよう頼んだ。それでようやく午後三時半頃、みんなで無事BCに帰着

することができた。

一人の登頂者もなく、これで終わるのかと思うと残念で、さみしい気がした。隊長の「さんは、高所登山にかけては日本でも有数の戦略家だと言われている人だ。天候回復の兆しをこの時点ではつきりと読み取り、確信を持たれたに違いない。そしてうまい具合に（晩もこのBCで体を休められる結果となっていた最年少女性に2歳のさつちゃんがいることに思いを馳せた。そこで彼女に明日のワンデイアセント（一日でBC山頂間を往復すること）という決断を促した。初めのうちは彼女も「私なんかにとっても…」と自信がなさそうだったが、実際にその経験がある「さん」から「明日はきつと穏やかな天気に戻復するだろう。隊としては下山準備の仕事があるが、君は隊を代表したつもりで挑戦してみないか」と励まし決意を促した。

11日午前3時10分さつちゃんはBCを出発した。何と幸運、頭上には満月が煌々と輝いていた。そして出発後2時間半の午後5時40分、ついにアコンカグア山頂に到着した。無線機からさつちゃんの「ただいま頂上に着きました」という声が流れると、食堂テントに集まっていた全員が一やったくバンザイと歓声を上げ我が事として喜び、その快挙を祝った。BC帰還は夜の闇、まだ月の出る前の午後二時45分。何と往復30時間35分の大健闘だった。下部ではルー

トが分かりづらいため、無線で誘導したり、上部へ少し迎えに上がったたりしての、無事帰着であつた。

今回のこの体験を通して、「さん」とぼくらとの絆が一層深まり、それはカラコルム・ヒマラヤそして谷川岳・ノ倉沢などへとつながっていくことになりました。



出典：フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

作者：Mariordo Mario Roberto Duran Ortiz